

令和2年度 自己評価表(中間評価)

中長期目標 (学校ビジョン)	1. 主体的学習者の育成 2. 21世紀をリードする人材の育成
-------------------	------------------------------------

○評価基準 A 80%以上(概ね達成) B 60~80%(一定の成果がある) C 40~60%(さらなる努力が必要) D 40%以下(現状が改善されていない)

今年度の重点目標	1 次代の担い手として、次代を生き抜く学力の伸長 2 定時制教育のさらなる充実 3 業務改善の取り組み
----------	---

【全日制課程】

評価項目		具体的項目	現状	年度当初	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	中間評価結果(10月)	評価	後期に向けての改善方策
学力向上	基礎学力の定着(知識・技能の習得)		・家庭学習時間1日3時間の目標は、全学年の平均で達成できているが、毎年1、2年次生が到達していない。時間割編成上、個のレベルに応じた授業には限界があるが、学力層に応じた課題が用意され与えられている。 ・リメディアルはできていない。1年次において到達度テスト(スタディサプリ)が活用され始めている。	・家庭学習時間は1日3時間は確保され、学力に応じた課題と授業により、効果的な学力の定着が図られている。 ・生徒は個々のつまづきに対応した学び直しを家庭で行い、基礎学力の定着を進めている。	・各種行事がスケジュール通り行なわれるだけでなく、アンケートの満足群が75%以上になっている。 ・探究成果発表会には、保護者や中学生など200人以上の外部参観者がある。 ・ビデオ会議やeメール等、探究活動を通して、海外との交流が盛んに行なわれている。 ・図書館の貸出冊数は一昨年度比で約20%増加したが、今年度から朝読書が廃止され、今後読書離れが予想されている。	・先遣校の事例研究を進め、ゼミ担当教職員に適切な情報提供を行う。また生徒の意見を適時集約しながら、結果を活動にフィードバックしていく。 ・1月30日土曜公開講座とし、発表形式も全生徒によるポスター発表に変え、外部の方々が来校しやすい日程・内容に変更する。 ・昨年のノウハウを活かし、必要な機材を購入してネット会議の環境設定を行なう。 ・ビデオチャットの開催や、図書館の紹介を通じて読書に対する関心を高め、併せて適切な新刊購入を行ない図書館の環境整備を進める。	家庭学習調査は、4.6.9月の3回を実施した。3回の1日平均は、1年225分、2年217分、3年251分と各学年とも38時間以上確保されている。60分以下の生徒は各学年1~2名程度。今年度より、学校設定科目が3年に増え、習熟度別授業ができています。 1年生の4月当初のリメディアルは、covid19による臨時休校等のため、十分できなかった。7月の外部模試の結果は国語57.3(昨年54.8)、数学53.2(昨年54.7)、英語52.5(昨年52.2)であり、数学と英語においては、上位層が薄い結果であった。	B	家庭学習調査を2回実施する。 ソーシャルメディアの確保しながら、ICTを活用した対話的深い学びの授業を工夫する。	
			思考力・判断力・表現力の伸長	・各教科において入試改革による思考力、判断力、表現力をみる問題の研究をすすめているが、授業評価アンケートの「授業で教え合いや課題解決の場面がかなりある」は64.7%であった。 ・各教科において来年度の入試改革に対応した評価問題の研究が行われているが、教科を超えた話し合いや、成果物を共有する場は設けられていない。	・授業を通じて生徒は基礎学力が定着し、思考力、判断力、表現力が高まっており、今年度の授業評価の「授業内での課題解決の場面がかなりある」の数値が80%となっている。 ・先遣校視察の後に授業実践報告書を作成し職員研修で共有する。 ・授業アンケートは2年2回の実施を継続するとともに、アンケート内容の再検討を行う。 ・各教科で思考力、判断力、表現力をみる評価問題と評価ルーブリックの研究を進め、公開を目指す。	教育実習が10月に延期になった関係で教員の公開授業は10月に実施する予定である。ルーブリックの先遣校視察は実施できていない。校外模試の結果においては、知識問題結果に対して思考問題の結果が追いついていない現状がある。	B	教育実習の2週間を相互授業参観の日に当てる。各教科の研究授業を思考力、判断力表現力と高めることに焦点を絞って実施する。 先遣校視察は、未定である。		
探究学習	探究活動の推進		・昨年度の2年次の探究学習は予定通り実施できたが、アンケートでは「探究活動に満足」や「満足」の合計が51%にとどまり、生徒自身が充実していたと実感できる活動にはなっていない。 ・探究成果発表会は、倉吉未来中心大ホールを使って大々的に実施できたが、来客が少なほ校内だけの発表に止まった。 ・世界的な新型コロナウイルス流行を受けて、韓国・安養高校、シンガポール・セントジョセフ高校との新たな交流の在り方が模索されている。 ・図書館の貸出冊数は一昨年度比で約20%増加したが、今年度から朝読書が廃止され、今後読書離れが予想されている。	・各種行事がスケジュール通り行なわれるだけでなく、アンケートの満足群が75%以上になっている。 ・探究成果発表会には、保護者や中学生など200人以上の外部参観者がある。 ・ビデオ会議やeメール等、探究活動を通して、海外との交流が盛んに行なわれている。 ・生徒が主体的に読書を行い、図書館の貸出冊数が前年比で20%増加している。	・先遣校の事例研究を進め、ゼミ担当教職員に適切な情報提供を行う。また生徒の意見を適時集約しながら、結果を活動にフィードバックしていく。 ・1月30日土曜公開講座とし、発表形式も全生徒によるポスター発表に変え、外部の方々来校しやすい日程・内容に変更する。 ・昨年のノウハウを活かし、必要な機材を購入してネット会議の環境設定を行なう。 ・ビデオチャットの開催や、図書館の紹介を通じて読書に対する関心を高め、併せて適切な新刊購入を行ない図書館の環境整備を進める。	・先遣校の事例研究を進め、ゼミ担当教職員に適切な情報提供を行う。また生徒の意見を適時集約しながら、結果を活動にフィードバックしていく。 ・1月30日土曜公開講座とし、発表形式も全生徒によるポスター発表に変え、外部の方々来校しやすい日程・内容に変更する。 ・昨年のノウハウを活かし、必要な機材を購入してネット会議の環境設定を行なう。 ・ビデオチャットの開催や、図書館の紹介を通じて読書に対する関心を高め、併せて適切な新刊購入を行ない図書館の環境整備を進める。	・教員研修を2回実施した。また、生徒のスマホを活用し、探究しやすい環境を整備した。 ・外部の参観に関しては、新型コロナウイルスの影響で難しい状況にある。 ・海外との交流はかしまスタートが運ばれたが、3校ともに順調に進んでいる。 ・教員の本の紹介は高評価を得て、ビデオチャットに関しては大成功した。しかし貸出冊数は朝読書廃止、コロナ休業などの影響もあり、8月まで前年比65%に止まっている。 ・フランス単位のビデオチャットでチャンピオンに選ばれた本を図書館で購入・展示して、イベントと読書が結びつきやすい環境を整えていく。また、ビデオチャットに関しては図書委員を中心に、放課後の開催を定期的に継続していく。	B	・今後も教員研修を適時実施していく他、GSを通じて教員への情報提供に努める。 ・外部の参観者が限定されることも想定に入れて、中間発表会・成果発表会ともに、生徒が主体的に活動できる体制を組む。 ・海外の高校との交流に関しては、担当期間でも密接な情報共有に努め、適切に生徒の活動をサポートしていく。 ・フランス単位のビデオチャットでチャンピオンに選ばれた本を図書館で購入・展示して、イベントと読書が結びつきやすい環境を整えていく。また、ビデオチャットに関しては図書委員を中心に、放課後の開催を定期的に継続していく。	
			キャリア教育	キャリア教育の充実	・生徒のキャリアを明確にする過程を通して、生徒の将来の選択肢や可能性を広げることが十分にできておらず、限られた既知の知識や認識の中で生徒の将来像が決定されてしまっている場合がみられる。 ・昨年度末までに3年間を見通した学習に関するロードマップを作成したが、全教科による運用が行われておらず、リメディアルが必要な生徒や発展的な学習が必要な生徒への手立てが効果的に行われておらずと見えな。	・生徒が様々な選択肢の中から自分のキャリアに適した将来像を決定することができる。 ・生徒が3年間を見通した計画的かつ効果的な学習活動を行うことで、自己の進路実現に向けた学力を身につけている。 ・大学合格者数が学校指標(東京大学合格者を含む難関大学合格者5名以上、難関大学合格者20名以上、中堅大学合格者50名以上)に到達している。	・進路学習を見直し、進路学習の時間だけに留まらな3年間に亘ったキャリア形成活動となるよう計画する。 ・3年間を見通した学習に関するロードマップを全教科で効果的に運用する。 ・高大接続改革についての研究を行う。 ・大学入共通テストについての研究を行う。	・1、2年生に関しては進路に関するロードマップを作成し、ロードマップに基づいた進路学習、進路指導を計画・実行している。 ・全学年で学習に関するロードマップを運用している。 ・大学入共通テストに関する情報を収集している。	B	・進路に関するロードマップについては、1、2年生を修正しつつ、3年生の作成に向けて努力する。 ・学習に関するロードマップについては、各教科で修正しつつ、よりよいものを作成していく。 ・大学入共通テストに関する情報を学年や教科へ還元する。
学校行事の充実			・「文武両道」を実現し、部活動や学校行事へ積極的に取り組み成果を上げる一方で、部活動や学校行事に対して生徒・教職員の様々な意見がある。伝統や慣習の良さを踏まえつつも、生徒の要望や働き改革なども考慮し、より効果的な学校行事や部活動の運営が求められている。 ・学園祭は生徒の主体的な活動に基づき、創造力を発揮して感動を生み出す、伝統的な行事となっている。	・学校はガイドラインに沿った部活動の実践を行い、部活動が生徒にとって喜びや生きがいのある場となり、生徒アンケートの結果で肯定的回答が90%を超えている。 ・働き改革を踏まえ、部活動と行事などのバランスが取れている。 ・生徒の自主性や創造力がさらに発揮され、学園祭がさらに魅力的な行事となっている。	・部活動時間を見直し、改めて生徒の主体性を促す。教職員は生徒が自発的に行動する場を提供し、充実した活動となるよう努める。生徒が熱心に部活動に取り組める環境づくりをするとともに勉強とのバランスがとれるよう工夫する。 ・学校行事や部活動の精選など伝統を大切にしながらも、よりよいあり方を検討する。 ・学園祭の重要性に対する認識を共有し、生徒の自主性を尊重しながら教職員が適切な支援を行っていく。	・本年度は感染症予防を徹底した前例のない部活動となっている。内容・時間ともに制限される中で各顧問が工夫をこらして生徒に活動の機会を確保している。また生徒もあらためて部活動ができることへのありがたさを感じ、熱心に活動している。活動時間もルールに則っている。 ・学校行事や部活動の精選については後期に検討する。 ・生徒、教職員ともに学園祭の意義を感じながら、感染症予防を意識した新しい学園祭のスタイルを提案することができた。	B	・今後も現在のような感染症予防を意識した活動が予想される。教職員は生徒にとっての部活動の意義を改めて認識して、最大限に生徒に活動の機会を確保するよう心がける。生徒会部はガイドラインの周知や消毒設備の充実などを通して環境の整備に力を入れる。 ・県内他校の情報なども収集しながら、本校の学校行事や部活動の形を作っていく。 ・学園祭については、生徒実行委員会と生徒会部が協力して、本年度の新たな学園祭の内容のうち、継承していく部分と改善していく部分について本年度中にまとめている。		
			人権教育の充実	・生徒は概ね安心安全な学校生活を送っている。 ・人権教育LHR委員は、教職員と話し合いを持ちながらLHRの運営をしているが、他の生徒の取り組みが受け身になりがちである。	・生徒一人一人が大切にされ、自分らしく、安心安全な学校生活を送っている。 ・教職員の指導のもと、人権教育LHR委員が中心となり、人権教育LHRの企画・立案・運営を行うことで、活発な意見交換が行われ、人権意識が高まっている。	・授業、学校行事、部活動など全教科全領域に亘り人権教育に取り組む意識を持つ。 ・すべての生徒が自分ごととして人権について考えられるよう、探究型の人権教育LHRの企画から教職員が深く関わる。	・教職員人権教育研修会を通して差別の現実やその解消への取り組みについて学び、人権意識の向上を図った。 ・人権教育LHRの準備を計画的に進め、様々な人権課題を自らの問題として捉えられるよう、今以上に教職員が深く関わりながらLHRに向け話し合いを重ねる。	B		
生徒の活動、学校の取組の情報発信			・学校・育友会ホームページや倉東ふり等広報誌によって本校の教育活動についてリアルタイムな情報発信に努めたが、ホームページにおいて一部、部活動情報等の更新がやや不十分であった。 ・育友会には、「大人の一言」や「進歩大会での豚汁支援」など様々な取り組みを通して生徒の教育活動をサポートしていただいている。また、同窓会においても、基金を通して経済的な面で生徒の教育活動を支援していただいている。	・本校の教育活動に係るリアルタイムな情報発信に努め、地域・保護者・中学生等へ広く情報提供できている。 ・本校の教育方針を踏まえ、育友会や同窓会との連携をより一層充実させ、生徒を学習面・生活面で支援するとともに会員一人一人が学び、参加・交流できるような活動が展開されている。	・外部講師を招き、校内職員向け研修を企画する。 ・先遣校を視察し、事例の収集につとめる。 ・教職員用タブレットやICT支援員の活用をはかり、従来の指導にICTを加えていく。	・様々な行事についてリアルタイムな情報発信に努めているが、部活動記事の更新頻度が異なる(新型コロナウイルスの影響で大会が中止となり話題が少なかつたり、VOTIROがあることで手間は増え、記事を上げなくなってしまう部活動もある) ・新型コロナウイルスの影響で学校・育友会・同窓会関係の行事開催が困難となる中、予防対策を踏まえ、規模の縮小・ICT活用など実施方法を工夫しながら可能な限り実施していった。	B	・部活動記事の更新を再度学年と各顧問にお願いする。		
			ICT環境整備とICT活用教育の研究・推進	・iPadの使用は多いが、クラウドを使用し指導は少ない。 ・生徒のBYOD(BringYourOwnDevice個人端末を使用した学び)では、生徒のスキル、モラルの育成が課題である。 ・無線AP(AccessPoint接続箇所)を設置している教室数が少なく校内LANに課題がある。	・GiGA(Global and Innovation Gateway for All 誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び)スクール構想で校内無線LANの改善、無線APの設置を進めている。 ・生徒が適切にICT(Information Communication Technology 情報通信技術)機器を使用し、学習や生徒会活動に取り組んでいる。 ・教員が生徒を指導するための十分なスキルを身に付けている。	・担当教職員は、NII(国立情報学研究所)、岡山県理大、日本教育工学協会、グーグル研修に参加し、教員研修の場において還元している。 ・covid19によってICT関連のスキルアップが急務となる中、iPadは80台に増やし、タブレット型・パソコン台を準備と各教室のプロジェクトの更新しなどを進めた。 ・ICT支援員1名の配置により、分散登校、分散授業におけるリモート授業が取り組みやすくなった。	B	・今後も、生徒系ネットワークを活用した生徒連絡、課題配信を積極的に進める。 ・ICT支援員ができることを明確にして、全教職員が相談しやすい雰囲気をつくり、ICTを活用できる体制を整える。 ・岡山県立林野高校に視察し生徒の端末について検討を進める。		
			国際バカロレア(IB)教育認定に向けた準備と研究	・昨年度末に候補校申請し、2020年4月13日に正式に候補校となった。今後2022年の認定校申請、2024年の授業開始に向けて調査研究とあわせてカリキュラム編成、施設整備、人材確保などが急務である。	・学校全体としてIB教育の理解が深まり、教職員それぞれが2024年に向けて協働する姿勢ができている。 ・施設整備や人材確保に向けて具体的な立案がなされて進行している。	・校内IB教育導入委員会を実施し、校内の準備を進める。 ・校内の研修会を実施し、教職員の理解を進める。 ・IBのWS(Workshop)派遣及び先遣校視察を実施し、教職員の専門知識の習得と還元を行う。 ・地域におけるセミナーを開催し、地域のIB教育への理解を得る。	・5回の校内IB委員会と、IBのコンサルトリモート研修を実施した。9月には5名の職員がワークショップに参加し、DP(DiplomaProgramme)の具体的なコースアウトライン(シラバス)の作成が進みつつある。地域セミナーについては県教委に打診中である。 ・教職員対象の研修は、10月を予定している。またウェブ開催の各種学習会に参加し、情報収集と研究が進行中である。 ・施設設備はコンサルトのアドバイスのもと確認でき、設置については県と交渉中である。	B	・校内の研修会を11月に実施し教職員の理解を深める。 IBのコンサルトと相談を継続して準備を進めていく。	

【定時制課程】

評価項目		具体的項目	現状	年度当初	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	中間評価結果(10月)	評価	後期に向けての改善方策
定時制教育のさらなる充実	積極的な生徒指導による授業規律の確立と主体性の育成		・授業規律を守り、生徒会活動においてもその重要性を意識し活動している。講演等の内容を肯定的にとらえ、高い進路目標を目指して学校生活と就労を両立させている。 ・2年次生関西研修で夜間中学生との交流を通して学ぶことの意義について考えたとともに、企業見学等を通して生徒の進路意識が高まっている。 ・各行事を生徒会執行部が中心となって運営している。 ・日頃から生徒理解に努め、家庭訪問・職場訪問・個別面談・保護者懇談などを実施し迅速で適切な生徒指導に努めている。	・規律ある学習態度が維持されており、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。 ・生徒の授業に対する理解度や満足度が高く、学習意欲や学力が向上している。 ・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことにより、社会で必要とされる力を身につけることができる。	・授業規律の重要性を認識させるとともに、常に個々に応じた授業改善に努め、生徒の理解度や満足度の高い授業を目指す。 ・関西研修、しげ産業文化探訪等の活動内容が学習意欲をさらに高めるよう、その地域でしか見られない見学先を精選し多面的な指導を行う。 ・生徒が中心となって生徒会活動を運営し、生徒の連携が強まる指導を行う。 ・学校から積極的に情報提供を行うと同時に、保護者が相談しやすい体制を整え、学校と家庭の信頼関係の構築に努める。	・入学当初からの丁寧な指導により、新入生も学校生活を安全な居場所と感じおり、生徒集団は落ち着いた雰囲気の中、規律を守り授業に取り組んでいる。 ・9月の授業アンケートでは、肯定的な回答の割合は変わらないものの、A評価が減りB評価が増えた。どの項目も平均的に同じ傾向がみられるので、新入生の評価傾向が影響した可能性が大きい。 ・担任、進路担当、CA、SSWが連携した取り組みで、きめ細かな進路指導がなされている。また、進路志望者の増加傾向を受け、手厚い課外指導で学力保障に努めている。 ・満足中止や2年次関西研修の延期など、授業以外の活動が制限される中ではあったが、対面式、生徒総会、新たに企画した夏フェスティバルなどの行事を、生徒会執行部が中心となって運営し、年次を超えた交流が深まった。 ・春夏の交通安全運動期間中に、生徒会を中心とした生徒が教職員とともに積極的にあいさつと交通安全の呼びかけを行った。 ・行事が減少したため、ホームページによる情報発信の回数が少なかった。 ・毎日、生徒情報の共有を行うと共に、5月の家庭訪問・7月9月の保護者面談・日常のこまめな家庭連絡などにより、生徒の状況把握に努めている。その上でSC、SSW、CA、外部機関等との連携の下、生徒の困り感やトラブルにいち早く気づき対応することができている。 ・喫煙や飲酒などを含め、マナー・ルールのあり方が生徒に浸透し、指導にいたがう態度に改善がみられた。	B	・規律は保たれているが、学びへの意欲の喚起という点では、授業内容や展開、ICTの活用などでさらに工夫の余地がある。生徒の授業満足度の向上を図るため、教職員の相互授業参観などを基に、さらに指導方法や教材の改善に取り組みする。 ・進路志望者に対し、進路実現のため取り組むべきことの見直しを立てさせる指導方法について研究を進める。 ・前期執行部から後期執行部への引き継ぎがスムーズに行われるよう協力を使い、今後の学校行事や県生徒連盟大会などで、生徒の主体的な活動を引き出すことで、自己肯定感の高揚につなげる。 ・行事にこだわらず、日常的なドックも取り上げ、ホームページによる情報発信の機会を増やす。 ・引き続きあらゆる手段を活用し生徒の共通理解に努め、指導が適時適切なものとなるよう、相談体制・指導体制を整えていく。		
			業務改善の取り組み	・学校行事・研修会等の見直し ・長時間勤務者の解消	・目的が重複する行事やその準備等によって、勤務時間の長大化につながっている。 ・各部で休養日の設定を行ったが、徹底できていない部もあった。 ・完全下校時間の徹底が不十分であった。	・優先順位の高いものについて2つ以上の業務削減。 ・教職員の月当たりの時間外業務を月平均30時間以内。 ・休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底。	・全日制は、部活動の休業日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底を働きかけている。 ・定時制は、学校行事や校務分掌のバランスは保っている。	・年度当初は新型コロナウイルス感染症予防対策のため部活動指導時間が押さられ長時間外勤務時間もなかった。部活動調整の各種大会が制限の緩和に伴って実施されるようになり、大会に向けての部活動指導時間が増え、時間外勤務時間の上昇が見られた。	B	・運動・文化部活動学校方針の徹底と業務の見直しを引き続き実施する。

【全日・定時制課程共通】

評価項目		具体的項目	現状	年度当初	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	中間評価結果(10月)	評価	後期に向けての改善方策
業務改善の取り組み			・目的が重複する行事やその準備等によって、勤務時間の長大化につながっている。 ・各部で休養日の設定を行ったが、徹底できていない部もあった。 ・完全下校時間の徹底が不十分であった。	・優先順位の高いものについて2つ以上の業務削減。 ・教職員の月当たりの時間外業務を月平均30時間以内。 ・休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底。	・全日制は、部活動の休業日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底を働きかけている。 ・定時制は、学校行事や校務分掌のバランスは保っている。	・年度当初は新型コロナウイルス感染症予防対策のため部活動指導時間が押さられ長時間外勤務時間もなかった。部活動調整の各種大会が制限の緩和に伴って実施されるようになり、大会に向けての部活動指導時間が増え、時間外勤務時間の上昇が見られた。	B	・運動・文化部活動学校方針の徹底と業務の見直しを引き続き実施する。		